OISO MUNICIPAL MUSEUM

Report リポート

大磯町郷土資料館だより
2019・3・8
39

目次

2 開館 30 周年記念企画展開催報告
5 民俗マンスリー展示の実施について
7 平成 29 年度春季企画展「ちょっと昔の暮らしと道具」開催報告
8 大磯御船祭

郷土資料館起工式（1987 年）

工事中の郷土資料館（1988 年）

完成したばかりの常設展示室（1988 年）

郷土資料館開館式（1988 年）

開館30周年記念企画展開催報告

大磯町郷土資料館は、平成30（2018）年10月25日に開館30年を迎えました。開館30年を記念して、今年度は企画展①「大磯町郷土資料館30年間の軌跡―大磯町の博物館活動を振り返る―」、企画展②「ＯＩＳＯ～（海＋山）×人～」、ミニ企画展「チラシで振り返る企画展30年」を開催しました。企画展の内容をそれぞれまとめます。

企画展①

「大磯町郷土資料館30年間の軌跡

―大磯町の博物館活動を振り返る―」

企画展第一弾では、郷土資料館の30年間の活動を振り返り、博物館活動の根幹ともいえる資料の収集によって収蔵しているとっておきの資料を、考古、歴史、民俗、自然の4分野でそれぞれ紹介しました。ここでは、展示でまとめた郷土資料館の30年間の活動について紹介します。

大磯町の博物館活動は、郷土資料館が開館する前から始まります。元をたどると、昭和27（1952）年に戦後の行政改革によって教育委員会が誕生したことから、地域資料の収集が始まりました。昭和31年には『大磯町文化史』という当時の自治体史が編纂され、刊行に向けて地域資料の収集が広報によって呼びかけられていた様子がうかがえます。記録に残る最も古い資料の収集は、昭和38年。小田原提灯などの資料を寄贈いただいています。

昭和58年、町立図書館が現在の建物に移り、図書館内に郷土資料館の前身にあたる「郷土資料研究室」が設置されました。その頃、昭和47年に解体された三井家別邸「城山荘」の跡地を公園化する動きがあり、公園内に設置する施設として博物館施設を設置する案が浮上します。昭和59年3月に県が策定した「大磯城山公園基本計画」において、郷土資料館の設置が盛り込まれ、博物館施設の設置が正式に決まりました。

郷土資料館の本体工事は昭和62年6月に始まり、翌年3月に完成、外構工事や展示工事を経て、10月25日に開館となりました。

郷土資料館開館当初は、特別展や企画展の開催が主な活動でしたが、平成11年には一般の方が資料の整理や調査に参加する学級活動が始まり、地域博物館の特徴でもある町民との協働事業に着手します。平成19年にはブログ「大磯町郷土資料館ノート」を開設。ＩＴ時代に合わせて、インターネットの活用も行うようになりました。

開館10年目頃から検討課題となっていた常設展示のリニューアルは、財政事情などの課題からなかなか進みませんでしたが、旧吉田茂邸の再建工事に併せて予算化の目途がたち、開館30年目前となった平成28年11月3日に、遂にリニューアルオープンを叶えることができました。

ミニ企画展

「チラシで振り返る企画展30年」

ミニ企画展は、企画展①、②の開催期間と併せて行い、会期中2回の展示替えを行いました。30年間で当館が開催した特別展及び企画展のチラシやポスターを、10年ごとにまとめて紹介しました。

最初の10年間は、費用を掛け、大規模に行う展示として、企画展と区別した「特別展」を開催し、ポスターを作成していました。デザインはアナログで印刷業者に指示していたため、最近とはだいぶ異なる仕様となっています。近年は、パソコンで画像などを編集するＤＴＰ編集用のソフトを使用して、学芸員が直接レイアウトを作成しています。30年間を振り返ることによって、テーマの変化だけでなく、近年の印刷事情の変化をうかがい知ることができました。

ミニ企画展の様子（特別展で使用したポスターなど）

企画展②

「ＯＩＳＯ～（海＋山）×人～」

企画展第二弾では、郷土資料館が地域の総合博物館として活動している強みを紹介したいと考え、ある一つのテーマを、考古、歴史、民俗、自然の４分野から総合的に捉える試みを行いました。テーマとしたのは、大磯の地域的特徴でもある丘陵と海を体現する高麗山と照ヶ崎です。それぞれの分野から見る高麗山と照ヶ崎にはどのような特徴があり、どのような関係性を見出せたのかをまとめます。

高麗山

【自然からみる】

高麗山は大磯町高麗にあり、丹沢山塊から連なる大磯丘陵の東端に位置しています。高麗山は３つの峰に分かれ、東の峰を東天照、西の峰を八俵山、中の峰を大堂といい､最高峰は大堂の標高 168 ｍです。

近年まで残っていた古木の存在から、当初、植栽された樹木は、クロマツ、スギで、江戸時代に植栽されたものと考えられます。しかしながら、クロマツは枯死し、現在は、タブノキやスダジイが優占する照葉樹林を形成しています。アラカシ、ネズミモチ、ヤブツバキなどの常緑広葉樹の他に、神奈川県中部を北限域とするモクレイシが広い範囲で混生し、特徴的な鹿の子模様の樹皮を持つカゴノキも点在しています。

昭和 47（1972）年には、東海道沿線では、自然林が残存している唯一の場所であり、学術的に貴重であるため、南斜面 11 ヘクタールが神奈川県の天然記念物に指定されました。

海上から見た高麗山

【考古からみる】

高麗山の３つの峰の内、西の峰にあたる八俵山からは、弥生土器の破片や礫などが出土しています。

相模湾岸には、防御的機能を持つと考えられる高地性遺跡が現在の熱海市、小田原市、二宮町、茅ヶ崎市、藤沢市江の島、横須賀市などに連続して存在しており、関東地方南部の弥生文化の特色を示すものとされています。

高麗山は海に面した特徴的な山であり、出土した弥生土器なども高地性遺跡に関わる資料である可能性が考えられます。

【歴史からみる】

高麗山は信仰の地として歴史に登場します。起源には諸説ありますが、高麗権現が祀られ、高麗寺という神仏習合の信仰が古来から江戸時代まで続いたことは紛れもない事実です。（よく語られる高麗王若光の存在は、文献上の根拠はなく、伝承の域を出ていません。）

高麗寺は鎌倉時代に最盛期を迎え、24 の僧坊があったと言います。北条政子などの時の権力者も祈願しました。平成 12（2000）年に高来神社で発見された神像は全部で 11 躯あり、そのうちの２躯の記銘から弘安５（1282）年に作られたものであることがわかりました。まさに高麗寺が最盛期を迎えた鎌倉時代に由来するものであり、当時の技術を伝えています。

高麗山は天然の要害でもあったことから、室町時代以降は軍事拠点となり、城が築かれました。戦場となった高麗寺は、16 世紀の戦で焼失し、古来から伝わる貴重な品々も失われてしまいました。

荒廃した高麗寺は、その後 200 年の時を経て、江戸時代に登場した敏腕住職、慧歓（えいかん）によって整備されました。明治時代の神仏分離政策によって、高来（たかく）神社となり、寺宝は慶覚院へ引き継がれたものの、現在の神社境内の建物や、慶覚院へ引き継がれた寺宝は、基本的に慧歓が整備したものです。

平成 26 年に、新たな史料として「年中行事要録」という、江戸時代と明治時代に高麗寺と高来神社で行われていた行事を、年間でまとめて書き表した史料が高来神社で見つかりました。毎年行う行事をも

れなく行うことができるよう、手引きとして使われたと考えられます。江戸時代から明治時代へ、寺から神社へ移り変わることによって変化した行事の様子がわかり、興味深い史料です。

【民俗からみる】

高麗山では、町指定民俗資料である「高麗の山神輿」が行われます。現在、「山神輿」は高来神社の春季例祭に先立つ行事として、高麗山神輿保存会の会員を中心に行われています。山の急斜面を三本の綱をかけながら山頂にある上宮跡まで登っていく場面が印象的で、毎年、多くの写真愛好家が撮影に来ています。

一方で、宵宮に行われている山車の巡行や山神輿の登頂前に行われている村神輿の巡行については、あまり注目されることがありませんでした。歴史的観点からも注目される高来神社所蔵の「年中行事要録」には、「高麗寺村を廻った後、山上へ行く」と書かれており、江戸時代から村内を渡御していたことがわかります。そして、この渡御が、現在でも村神輿の巡行という形で行われています。

山頂へと向かう方法は、江戸時代においても現在と同様に綱を用いて引き上げていったのではないかと考えられます。今回の展示の準備を通じて、「年中行事要録」以外にも、高来神社あるいは高麗寺に関する縁起類などの文献に「山神輿」に関係する記述が複数あることがわかりました。今回の展示のために行った調査の内容とあわせて、常設展示の解説や、配布している解説シートの内容に反映させる予定です。

山神輿の様子

照ヶ崎

【自然からみる】

照ヶ崎は大磯港西側に位置し、大磯町で唯一見られる岩礁地帯を含む海岸です。岩礁は地殻変動の影響で地層全体が垂直に傾き、南西から北東に層が連なっている状況が見られます。1日を通して、同じ景観が見られるわけではなく、満潮時は岩礁のほとんどが海面下に没します。干潮時は岩の窪みにタイドプールができ、季節に応じて様々な生物を観察することができます。照ヶ崎は岩礁帯が狭い範囲であるにもかかわらず、生物相が豊富であることが特徴といえます。

代表する生物としては、アオバトがあげられます。全長33cmの中型のハトで、全体が緑色の美しい羽色です。5月上旬から11月上旬にかけて、丹沢に生息するアオバトは海水吸飲のため、集団で飛来します。全国的にみて数少ないアオバトの集団飛来地ということで、平成8（1996）年に神奈川県の天然記念物に指定されました。

アオバト

【歴史からみる】

比較的単調な砂浜が続く、相模湾沿岸の中央部に位置する照ヶ崎は、その地形的特徴から港として利用されてきました。古くは、御船祭の木遣（きやり）歌にあるように、古代まで遡ることができるかもしれません。

江戸時代の大磯宿の様子を記した史料によると、輸送船6艘、漁船33艘、合計39艘の船があり、タイ、ヒラメ、ムツ、アジ、サバ、カツオ、アワビなどの魚介が獲れました。この時代の大磯は宿場町として知られていますが、幕府によって漁業を専業として行う浦に指定され、漁村としての一面も持って

いました。

明治期以降は、明治34（1901）年に公布された漁業法に基づき、同36年に漁業組合が設立されました。この時期は、ブリ漁が盛んになり、大正3（1914）年には大磯鰤敷網組合が設立されています。大磯のブリ漁は大正13年にピークを迎え、その後は不漁の時期を迎えましたが、昭和30年代までは多くのブリが獲れました。

このように港や漁場として活用されてきた照ヶ崎ですが、明治時代になると、海水浴場という新たな目的で利用されるようになりました。照ヶ崎周辺には大きな河川がなく川の水が混ざりにくい、遠浅で波が立ちやすい、北側に丘陵があって冬でも暖かいといった条件がそろい、海水浴場に適した場所として選ばれました。海水浴場や別荘地として知られることによって大磯は新たな活況を得ましたが、このことは照ヶ崎の地形が関係していました。

【民俗からみる】

照ヶ崎は、国の無形民俗文化財に指定されている「大磯の左義長」をはじめ、様々な行事が行われる信仰の場となっています。たとえば、オオシバナという新しく造った船が海に出るときや漁が少ない時にお神酒をあげて大漁を祈った場所があり、また高来神社の夏季例祭である通称「御船祭」の由来では、高来神社の神霊の本地物である千手観音が引き揚げられた場所として、照ヶ崎が登場します。

照ヶ崎への信仰は町内に限ったものではありません。伊勢原市にある高部屋神社では、毎年の例大祭にあわせて照ヶ崎の海岸から潮と浜砂、ホンダワラという海藻を採取する行事が行われています。今回の展示では、これらの信仰に関するものや行事を写真パネルで紹介しました。

照ヶ崎は数々の信仰の根付く場所である一方で、大磯における漁撈の中心地でもあり、現在も大磯港として利用されています。歴史分野では江戸時代における浦としての照ヶ崎を取り上げています。紹介した記録では、江戸時代には多種多様な魚が捕獲されていたことがわかります。江戸時代の漁撈活動においても、対象とする魚の種類にあわせて、漁法や利用する道具などを選んで利用していたと考えられます。民俗分野では、1年間のどの時期にどのような方法でどのような魚を獲っていたかを示した漁業暦とあわせて、それぞれの獲物にあわせて用いた釣針を展示することで、漁業の対象と方法の多様性を見ていきました。また、マグロなどを対象にした突き漁で用いられていた大型のモリも展示しました。

現在、常設展示室の民俗分野では祭礼と信仰に焦点を当てており、生業に関する展示は行っていません。大磯町の海浜部を代表する生業である漁撈関係の資料を展示できたため、民俗分野の常設展示を補完することにもつながったと考えています。

謝辞

「山神輿」の展示では、高麗山神輿保存会の皆様に聞き取りを行い、会長の原田氏には山神輿で利用されているハッピをお借りしました。改めて御礼申し上げます。

（当館館長　國見徹／当館学芸員　北水慶一／富田三紗子／川邉絢一郎）

民俗マンスリー展示の実施について

民俗担当では、当館がリニューアルした平成28年11月の翌月12月から平成30年3月まで、おおむね月に一度、展示替えを行う「マンスリー展示」を行いました。この展示は、常設展示室のスペースの一部を利用し、毎月異なった資料を展示する試みです。

当館の常設展示（民俗）は「祈り」をキーワードに、神仏への信仰を「祈りのかたち」、町内の祭礼・行事を「海に願う祭り　大地に託す祭り」と分類し、展示を行っています。そのため自ずと信仰に関する資料を中心にした展示となり、衣食住やそのほか日常生活で利用している道具は展示していません。当館では民俗分野に限らず、町民の方から寄贈いただ

いた資料など新収蔵資料を収集・整理する活動を続けていますが、それらの資料を紹介する場も限られています。民俗担当では、それらの資料を展示する機会を設けるとともに、常設展示を補完するため、マンスリー展示を実施しました。

前述した理由から、展示資料は、①新収蔵資料、②信仰以外の資料をメインにしました。祝儀・不祝儀の際に赤飯を入れるために利用したデーケーや急な不幸の際に羽織ったという紋付のハオリ、嫁入り道具として準備されたハリバコなど、新しく受け入れた資料の展示を行うとともに、ウナイグワやカゴ、アンドンビシなど、身近な生活の道具の展示も行いました。①と②に関しては、「常設展示を補完する」という当初の狙い通りに機能したものと考えています。

マンスリー展示の記録

実施期間		展示タイトル		展示資料
平成28（2016）年	12月	カゴと目一つ小僧		カゴ
平成29（2017）年	1月	ウナイゾメ　新年の仕事はじめ		ウナイグワ
	2月	新収蔵資料　デーケー		デーケー
	3月	雛人形とその原型		雛人形
	4月	新収蔵資料　ハオリ		ハオリ
	5月	端午の節句と鍾馗人形		五月人形
	8月	西小磯の七夕と竹神輿		竹神輿の模型
	9月	博物館実習展示	新収蔵資料　ハリバコ	ハリバコ
	10月		クスリバコ	クスリバコ
	11月		国府小学校の歴史とランドセル	ランドセル
	12月	ハコゼン		ハコゼン
平成30（2018）年	1月	左義長とサイトバライ		左義長の模型
	2月	大磯町内の稲荷講		イナリコのタイコ
	3月	アンドンビシ		アンドンビシ

実際に展示を行っていく中で、試みることになったのが町内で行われる年中行事の時期にあわせた③年中行事の紹介と④博物館実習生の展示実習としての活用です。

マンスリー展示開始当初から、身近な道具をその時々の年中行事と関連させながら展示を構築していったため、自ずと③年中行事の紹介を行う形になりました。前述したカゴの展示では、目一つ小僧の伝承とその対応として目の多いカゴやザルを竹竿に掲げる民俗を紹介しました。ウナイグワは、呼称のもとになっている「うなう（たがやす）」という行為とウナイグワの特徴に触れながら、同様に「うなう」という言葉がもとになっているウナイゾメという仕事はじめの行事について紹介しました。それ以外にも、上巳・端午の節句や七夕、小正月行事、稲荷講の時期にあわせて、それぞれ年中行事と資料の紹介を行いました。

④の博物館実習への活用は予定していたものではありませんでしたが、実物の資料を用い、資料の観察から調査、企画、展示まで、博物館における展示作業を一連の流れのなかで経験する場として利用することができました。

マンスリー展示を行うことで信仰だけに留まらず、衣食住や各種の仕事（生業）など、私たちの暮らしの持続と変化とを伝える民俗の一端を紹介することができたと考えています。「常設展示を補完する」という目標もある程度達成できました。ただし、毎月の展示替えのための企画・実施としたため、内容を深めることはできませんでした。常設展示の補完は、その内容をより深く追求していくスポット展示を実施することでも、実現することができます。今後の課題として、近隣地域の似たような行事と比較するなど、より深化させた内容をテーマとすることも検討したいと考えています。

（当館学芸員　川邉絢一郎）

平成29年度春季企画展
「ちょっと昔の暮らしと道具」開催報告

平成30年2月3日から3月31日まで、平成29年度春季企画展「ちょっと昔の暮らしと道具」を開催しました。昔の暮らしや道具をテーマにした企画展は、当館以外にも多くの博物館や資料館で、おおむね年が明けた時期に実施されています。小学校3年生の社会科では、ちょうどこの時期に「昔の暮らしと道具」の学習を行うことが多く、あわせてこのテーマに関する企画展が実施されています。当館の場合、毎年この時期になると町内の小学校から「昔の暮らしと道具」に関する授業の依頼があり、昔の暮らしと道具について、実際の道具に触れながら学ぶ機会を設けています。今回の企画展は、小学校の授業で学習を行う時期にあわせて企画しました。

同様の展示が多くの館で行われているという意味では、多くの展示事例があり、比較的実施しやすい展示であると言うこともできます。実際に展示担当者も、複数の館で同様のテーマによる展示を見た経験がありました。その一方で、いずれの地域でも実施し得るテーマで、大磯という地域の特徴を示し、他地域と差別化する課題がありました。

今回の展示では、私たちの身の回りにある生活の道具を、衣・食・住と仕事、4つの分野に分けて展示を行いました。それぞれの道具に対しては、使われている道具が移り変わっていく様子を中心に紹介しました。たとえば、着るもののしわを伸ばすための道具では、ヒノシやコテ、炭火アイロンなど炭火を利用した道具から、電気を利用したアイロンに変わっていく過程を展示しました。

課題であった大磯の特徴と他地域との差別化は、主に仕事の分野において示しました。当館は昭和63年の開館以来、「湘南の丘陵と海」をテーマに活動を続けています。大磯の特徴を一言で表現したこのテーマを、今回の企画展においても採用することにしました。丘陵部の仕事として農業を、海浜部の仕事として漁業を取り上げ、道具を紹介しました。

アンケートでは「台所の道具を見に来たが、展示されていなかった」というご意見をいただきました。また、「自分ではあまり使ったものはないが、なつかしい」、「自分の子どもの頃を思い出した」という意見もありました。今回の展示のタイトルには「ちょっと昔」というあいまいな言葉を入れています。これは「昔」という言葉から想像するイメージは、人それぞれであり、それぞれの「ちょっと昔」を話すことが、異なった世代の人と話すきっかけになれば良いという思いから採用しました。アンケートのコメントからは、「昔」という言葉が持つイメージの広がりだけではなく、「道具」という言葉が持つ意味も、人それぞれであることを改めて気づかされました。当初、念頭に入れていた小学生の来館者は多くありませんでしたが、「昔の道具を勉強している」というコメントがありました。また、会期中に国府小学校の3年生が見学に来るなど、学習の時期にあわせて展示を行った成果はあったようです。

今回の企画展では、関連事業として研修室と中庭を会場に、昔の道具にさわれる「さわれる展示」を実施しました。当館の常設展示では、実際に触れることができる展示を用意していないため、今回の企画展の試みとして実施しました。クワの種類と特徴や、テンビンボウやショイバシゴ、ショイカゴなど、様々な運搬の道具を用意した展示には、2日間で70名の方にご参加いただきました。2日間という限定された期間のため実施することができましたが、常設展示などより長期間にわたって実施する場合は、人員や資料保護などに課題が残りました。

今回の展示には、開館以来、多くの方にご寄贈いただいた当館の収蔵資料を利用しました。最後になりましたが、資料をご寄贈いただいた皆様に御礼申し上げます。

展示の様子

（当館学芸員　川邉絢一郎）

大磯御船祭

大磯御船祭は、毎年７月に行われる高来神社の大祭の一つです。その名にある通り、祭り船（舟山車）が出され、海に面している大磯の特徴であるともいえます。祭りの由来は、大昔大磯照ヶ崎の漁夫であった加藤蛸之丞（かとうたこのじょう）により、高麗権現の本地仏・千手観音像が海中から引き上げられたことから、始まったと伝えられています。大磯は昔から漁が盛んに行われており、高来神社は大漁祈願の場とされていました。この御船祭は漁師の義務であったとされ、漁で稼いだお金で開催し、祭りには必ず漁から帰って来なければ大磯の敷居を跨がせないなどと言われていました。千手観音が引き上げられた際、アワビも一緒に獲れたと言われ、アワビを神輿に奉饌することも受け継がれてきました。なお、アワビを海神に捧げる事例は、全国で確認することができます。

祭りで出される２艘の祭り舟は、現在は両方とも明神丸（みょうじんまる）という名前で、北下町・南下町の方々によりきれいに飾り付けされます。舟はケヤキ製で、往昔の天鶏船（あまのとりふね）をモデルに造られたとされています。北方の舟は、かつては権現丸と呼ばれ、舟の一番高いところには郷土資料館で展示されている「センドウ」と呼ばれる御幣を持った白丁姿の猿の人形が魔除けとして飾られます。

展示室に展示してあるセンドウ

祭りは毎年行われますが、祭り船は偶数年に曳かれ、その際に郷土資料館からこの人形は出されます。猿の人形は山王信仰から来ているとされ、他にも無数の小さな猿の人形を飾り付けるのは、身体健康や子孫繁栄を祈るための呪物だからだと言われています。

一方、もう１艘の南方での舟には、太鼓の上に羽毛を広げた金の鶏の形像が飾られます。この鶏は中国の伝承である、「諫鼓苔深くして鶏驚かず」（かんこ）からのカンコドリを表しているとされます。一説では、申年・酉年に造られたからという由来もあります。

祭りのなかでは、氏子が舟をひっぱる他に、木遣師（きやりし）による木遣唄や、歌上師（うたあげし）による舟唄が歌われます。木遣と舟唄は神酒所や神社、その他に世話人などの家の前で奉納のために歌われます。この船祭の特徴として内容の違う歌詞が多く、先に述べた蛸之丞の伝承や御船祭のはじまり、山王大権現についてなどさまざまな内容が歌われています。

木遣では、御船祭は応神天皇の御代にはじまり、当初は海上を渡御していたと伝えられています。また、大磯浦から花水川を遡り、高来神社で神輿を迎え、再び照ヶ崎に戻り浜降りの禊を行ったという伝承もあります。

参考文献

永田衡吉『神奈川県民俗芸能誌　増補改訂版』1998、錦正社
大磯町『大磯町史民俗調査報告書五　大磯の民俗（２）』1998、大磯町

（2018 年度博物館実習生　髙田彰太朗）

Report　－大磯町郷土資料館だより－　No. 39
平成 31(2019) 年 3 月 8 日発行
編集・発行　大磯町郷土資料館
〒 255-0005　神奈川県中郡大磯町西小磯 446-1
TEL. 0463(61)4700 ／ FAX. 0463(61)4660